

## 唐宋易学における「地理」の語義の変遷

益田理広

筑波大学生命環境系・非

地理学の語源たる「地理」の語は五経の一、『易経』を典拠とする。『易経』は哲学書としての性格を有し、「地理」の語義についてもその注釈を通し精緻な議論が展開されている。本稿は、初期の「地理」注釈である唐宋の所説を網羅し、東洋古来の「地理」概念がいかなる意味を以て理解され、かつどのように変遷したのかを明らかにしたものである。

唐代における最初期の「地理」には、地形や植生間の規則的な構造とする孔穎達、及び知覚可能な物質現象たる「気」の下降運動とする李鼎祚による二説が存在する。

続く宋代には「地理」の語義も複雑に洗練され、次のような変遷を経る。即ち、「地理」を(1)位置や現象の構造とする説、(2)認識上の区分に還元する説、(3)形而上の原理の現象への表出とする説、(4)有限の絶対空間とする説の四者が相次いで生まれたのである。

これら多様な「地理」の語義は、東洋地理学および地理哲学の伝統の一端を開示する好資料といえる。  
キーワード：東洋地理学、地理哲学、空間概念、中国哲学、易経

### I 序

#### 1. 研究目的

斯学に冠されたる「地理」なる語は、五経の第一である『易経』に由来する。『易経』は本文である『周易』、および孔子がその哲理を説き明かしたと伝えられる『十翼』から構成されるが、『十翼』中の一篇である『繫辞上傳』が「地理」の典拠である。そこには「仰以觀於天文、俯以察於地理、是故知幽明之故（仰ぎては以て天文を觀、俯しては以て地理を察る。この故に幽明の故を知る）」とあり、「地理」は「天文」と対を成し、「俯して以て察」られる所の観察の対象であり、その観察によって「幽明之故」を知り得るとされていることが分かる。しかし、そこに「地理」の語についての説明はなく、『易経』の文面のみからその意味を知る由はない。

それでは、これらの語義や文意は意味不明のものとして打ち棄てられたのか。無論そうではない。「地理」の出典たる『易経』は五経の筆頭として長らく尊重されてきた。『易経』は、「他の經

書に先立ち、且つその原理的な役割を果たし」、「儒家の原理的な思想表現は、この易経の解釋を根據として發表されてきた」（今井、1958:序1）といわれるように、儒学における理論および概念規定の源泉であった。それは、『易経』に対する注釈が、本文の文献学的な理解のみならず、儒学者各人の持つ学術理論の表明の場としても利用されたためである（今井、1958:序1）。このような性格を持つ『易経』は、現代中国でもなお学術上重視されており、「易学は人文地理学の哲学的方法論である」（孫、2012:274）といった言明さえ認められる。そして、その理論表明を目的とした注釈の主たる対象こそが、「地理」の直接の典拠である『繫辞上傳』である。これまでも多数の学者が『繫辞上傳』に対する注を介して各々の宇宙論や形而上学を展開しており、「地理」のような語彙についても、第一にはそれら注釈の所説に従って理解されたのであった。

ところが、既往の研究においてはこの種の事実は余り注視されなかったようで、「地理」の語義を説明する際には、そのただ字義を斟酌するか、